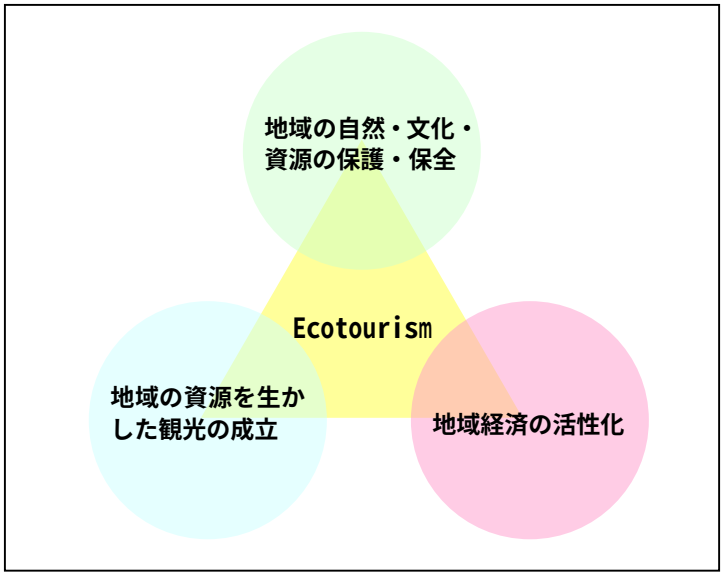
■■■■　参　考　資　料　■■■■■

1.エコツーリズムの定義と目的

エコツーリズムの概念は、“資源の持続なくして観光は成立せず”“地域住民の参画なくして資源は守れず”“経済効果無くして住民の参画は望めず”という３つの認識の上に成り立つ、観光産業と自然保護、地域振興の歩み寄りと融合の形である。

すなわち、３つをバランスよく構築することがエコツーリズムの**理想**であり、これを目指し実践される諸活動は、エコツーリズムの実現を目指しているといえよう。

エコツーリズムの目的は、その波及効果によって地域の暮らしがより豊かになること、地域の資源が守られること、訪れた観光客に自然や文化とふれあう機会が提供されることである。



３つのうち、どの目的が出発点となるかについては、実践しようとする地域の特性や状況による。東アフリカのように、絶滅の危機に瀕した野生動物の保護が急務である地域においては、自然保護が第一であり、ベトナムのように経済手段の確保が第一優先となる場合も考えられる。

理想は、３つの目的がお互いに距離を縮めて、エコツーリズムが地域の優良な地場産業として定着していくことである。

類似に「エコツアー」という言葉があげられるが、エコツアーは、実践の形態の１つであり、エコツーリズムは理念であるため、イコールではない。したがって、実際の商品となり得るのは、エコツアーである。

また、エコツーリズムの対極にあるものとして、マスツーリズムを捉える考え方がある。マスツーリズムが、企画段階における地域の資源に対する配慮不足等によって、マイナス要因をもたらしてきたのは事実であるが、必ずしもそうではなく、大量移動による経済波及効果もあり、これが自然保護に寄与するのであれば、マスツーリズムが否定されるもの

ではない。ただし、マスツーリズムによる資源のオーバーユースは、資源の消耗を引き起こすため、資源管理を如何に行うか、が、エコツーリズムの実践形態であるエコツアーにおいては、重要なポイントとなってくる。

2.インタープリターに求められる資質

エコツアーが、旅行者にとって、十分に満足できる内容であったか、リピーターとなりうるか、の要因のほとんどはインタープリターの質にかかっていると言える。

エコツアーには、地域の自然との接し方や地域の生活文化等について教え、知識を提供できるインタープリター（ツアーガイド）が必要である。インタープリターに求められるのは、決まったコースを連れて歩き、用意された同じ情報を伝えるといった、従来にあったような一般観光のガイドテクニックではなく、その地域の自然・文化・歴史と、来訪者である旅行者との間に立って、資源の良き代弁者として、旅行者に、地域の生活を理解させ、あるいは体験させ、さらに、保護への関心を高めることが出来る能力である。

インタープリターとは、インタープリテーションを行う能力のある人のことで、もとはアメリカの国立公園の中で体系づけられた概念である。

インタープリテーションとは、単なる知識の伝達ではなく、来訪者（旅行者）を楽しませ、啓発し、能動的な参加を得る中で、自然資源や環境保全に対する理解を深めさせ、資源に相応しい利用を則すための教育活動である。

以上を踏まえ、インタープリターに求められる資質について整理する。

Point1.資源の科学的な意味の解説

地域の自然・文化・歴史資源についての科学的な意味を解説する活動は、インタープリターの第一の役割である。

目の前の資源の価値について、学問的に正確な意味を伝達するには、「資源が貴重なものであるのか」「なぜ、そのにあるのか」「資源の生態的な特徴は何か」「ふれあうにあたっての注意事項は何か」「どうすれば保護できるのか」といった観点での解説が必要である。

適切な情報を伝え、資源とのつきあい方、関わり方を伝えていくことは、資源の持続的な利用からも必要なことであり、旅行者の興味を深める第一歩である。

エコツアーによる資源への悪影響を防ぐためには、旅行者が生態系について解説を受け、学んでいることが必要である。例として、海に投げ捨てたビニールゴミが、ウミガメの餌であるクラゲと類似しているため、ウミガメを殺すことになりかねないことを、海において、ウミガメを前にしながら解説することによって、絶大な教育効果・啓発効果を生むものとなる。

Point2.豊富な知識と高度な学術的専門知識

インタープリターは、その地域の資源についての豊富な知識と、高度な生態学や地質学等の素養を有することが必要である。

このようなインタープリター（ツアーガイド）がいて、現地での旅行者の監視をしつつ、かなり高度な解説を行ってこそ始めてエコツーリズムと呼べる観光形式の基礎ができあがると言える。

Point3.見えないものを見せてくれる仲介役

豊富で専門的な知識だけでは、資源の重要性等は理解できるが、図鑑や教科書の解説が現物を前にして行われたにすぎず、旅行者は、その地域に来たことに感動し、再度この地を訪れたいとは思わない。旅行者が、エコツアーを通じて、地域の新たな価値の発見にまで通じなければならない。

インタープリターは、資源との出会いを通じて、その地域に生活する人が、なぜその資源を大切にし、宝として保護してきたのか、という人の姿が見えてこそ、地域への愛着や畏敬の念が生まれてくることに留意する必要がある。

したがって、単に資源に関する知識の伝達にとどまらず、地域の人がどのようにその資源を利用し、関わりを持って今日に至っているかを説明し、地域からのメッセージを適切に翻訳して伝え、地域の生活の中から作り上げてきた歴史や文化、地域の人の資源への思い入れに対して、追体験できるような地域住民との架け橋になる内容の解説が必要である。

このような解説を、資源を目の前にしても、単に行うだけでは、十分な効果は期待できない。旅行者の興味を引きつけるための上手な解説のステップを踏むことも重要である。

まず、資源に対し関心を持たせ、興味をそそることが必要であり、その興味を旅行者が既に持っている知識や文化等と関連づけることが必要である。ついで、楽しませながら、現在から過去へ意識を遡らせ、さらに、未来像を想像させることも、保護・保全への関心を持たせるために重要である。

このようなシナリオに対して十分な満足を与えること、すなわち、旅行者からの質問に的確にこたえつつ、思考を誘導するテクニックが必要となる。

さらには、資源と接する際には、模範となるような責任ある行動をとり、旅行者に同様の行動を促すことも必要となる。

Point4.プログラム作成とマネジメント

インタープリターには、エコツアーの季節・時間・資源の特性に応じた、プログラムを組み立て、旅行者に提供する能力が要求される。

エコツーリズムにおいては、インタープリターが持っている知識や経験を商品として、体験プログラムに取り入れることが必要で、その能力も要求される。

例として、日々刻々と姿を変える自然現象や、資源との長い関わりの中から得た地域の人の自然との接し方に関する深い知識をもとに、それらを総合して他地域では味わえないプログラムやコースを企画する必要がある。このようなプログラムの企画に際しては、旅行者の年齢・経験・興味等を把握しておくことが必要であり、旅行者の安全管理や、さらには、マーケティング、効果的な PR 方法等にも精通していることが適切である。

Point5.資源管理能力

インタープリターは、資源の最前線で活躍するものであるから、資源の状態をキャッチするモニターとしての役割も担うものである。

オーバーユース等から資源を守り、持続的な利用を可能とする資源監視の観点から、資源の状況を管理者に適切に情報提示するとともに、資源管理の方針に反映させ、場合によっては、方針決定に参画する等の資質が求められる。

Point6.旅行者のコントロール

インタープリターは、地域の資源について、旅行中に旅行者の協力を得るための呼びかけを積極的に行うことも求められる。

ツアープログラムを通じて、知的情報の取得、旅行の楽しみ、刺激と体験、感動と思い出等を享受した旅行者に対して、資源保護・保全について協力を要請することが、旅行者を観光客から地域資源の理解者へと誘導することになる。

このことが、結果として、旅行者のエコツアーへの参加意義を明確にし、資源に愛着を持たせることになり、その意識が旅行者をリピートさせるきっかけとなるよう、誘導する能力も必要である。

3.エコツーリストの意向

エコツアーへの参加者は、全旅行者の約 7～10%を占めており、年々増加傾向にあるといわれている。

しかしながら、日本では、エコツーリストの要請・意向（地域への欲求事項や期待、満足する事項等）について、マーケティング上非常に重要かつ基本的なことが明らかにされていない。

エコツーリズムの分野に参画しようとする人が、どのような人たちを対象に、どのようなツアーをくめばよいのかを判断する材料として、また、よりよいツアーの工程やガイド内容を向上させるためには、客観的なデータの収集・分析は重要である。

以上を背景に、日本ではエコツアーの先進地域である西表島でのツアーをケーススタディとしてアンケート調査を行った実績がある。

アンケートは、マングローブ林を主なフィールドにシーカヤックのツアーを実施している（有）L.B.カヤックステーションの参加者を対象に行ったものである。

エコツアーの参加者像

①性別

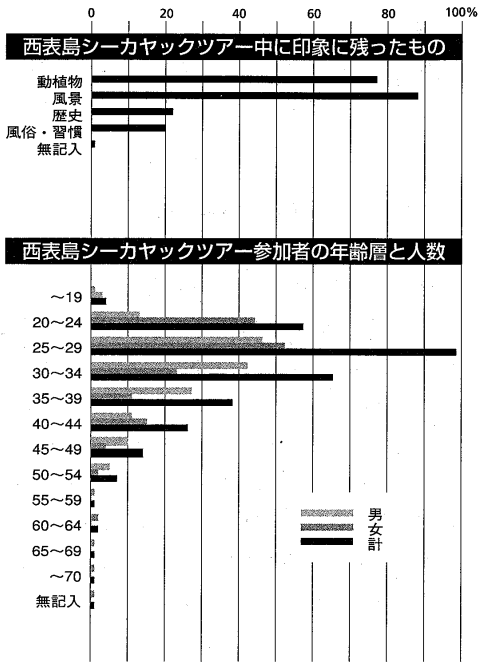
男性が154人（52%）、女性が140人（48%）と、参加者の男女の割合はほぼ同じ。

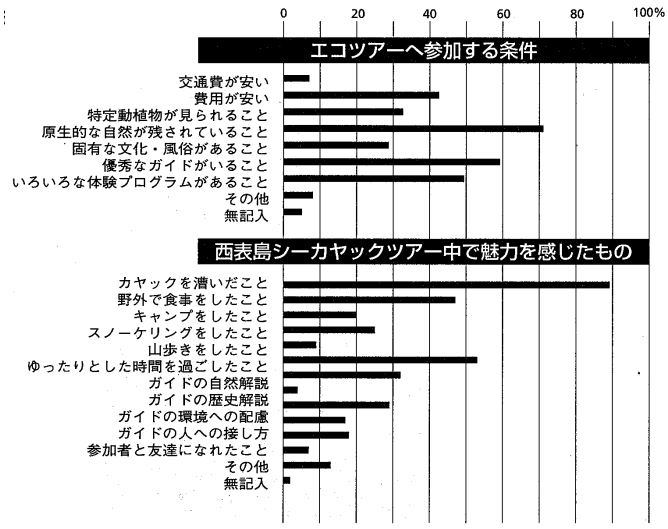
②年齢層

回答が得られた中で最も若かった参加者は18歳、最高齢者は71歳であった。男女合わせた参加者全体でみた場合、20代から30代の参加者が多く、この年齢層だけで参加者の85%を占めており、エコツーリズム参加者のコア年齢層と考えられる。最も多かった年齢層は20代後半（25歳～29歳）で96人（39%）であった。

これを男女別でみると、男性は20代後半から30代前半（25歳～29歳）にかけての参加者が多く、全参加者の29%、男性参加者中の56%を占めている。一方、女性は20代の参加者が多く、全参加者の32%、女性参加者の66%を占めている。

男女とも40歳を過ぎると参加者はまばらになってくるが、女性が50歳までで参加者がいなくなるのに対し、男性は50代から70代にかけてもわずかながら参加者がおり、参加者全体の３%、男性の６%を占めている。





参考文献：「エコツーリズムの世紀へ　1999.3　日本エコツーリズム協会」